



# 鶴の便り 鶴の便り

## 第十四回

### 民話の語り駅伝

五月二十九日(日)夕鶴の里友の会(伊藤進司会長)主催の第十四回「民話の語り駅伝」が、夕鶴の里語り部ホールで開催されました。

伊藤会長の挨拶で開会し、往路第一区の渡邊記美子さん(民話会ゆうづる)が「匂いの代金」を語り、順々とタスキがリレーされていき、往路十区では、長沢登代さんの「白竜湖の琴の音」が披露されました。

続いて、復路十一区は、友の会役員による、寸劇「みそ買い橋」が公演され、素人とは思えない役者ぶりに、会場は笑いの渦で大いに盛り上がっていました。タスキは十二区の戸田節子さんに渡

## 夕鶴の里資料館報

平成28年6月20日

第66号  
発行 夕鶴の里

TEL 47-5800

り、語りが披露され、次々とタスキが渡っていきました。二十区、アンカーは、民話会ゆうづるの堀敏子さんによる「勇気のある小僧つこ」が披露されゴールしました。



出演者、題目は  
次の通りです。

### 往路

- 一、渡邊記美子 (民話会ゆうづる) 『匂いの代金』
- 二、大滝由真 (漆山小六年生) 『寝言兄弟』
- 三、白岩彩矢 (赤湯小四年生) 『クモとハチ』
- 四、平山万貴子 (夕鶴の里友の会) 『見えない布』
- 五、尾形愛里沙 (漆山小六年生) 『長い名の子』
- 六、菅 美和子 (川西昔ばなしの会) 『柳清水』
- 七、佐藤理紗 (漆山小六年生) 『福は内』
- 八、芳村裕子 (米沢とんと昔の会) 『食わず女房』
- 九、須藤のり子 (まほろば語り部の会) 『酒の籠抜け』
- 十、長沢登代 (夕鶴の里友の会) 『白竜湖の琴の音』

### 復路

- 十一、友の会役員・寸劇 『みそ買い橋』
- 十二、戸田節子 (民話会ゆうづる) 『月に行った兔』
- 十三、武田佳己 (中川小五年生) 『松尾神社の石段』
- 十四、武田翔斗 (中川小五年生) 『静御前と夜泣き地蔵』
- 十五、遠藤優綺 (宮内小六年生) 『ぼたもち蛙』

## お蚕さまが来ました～



6月14日撮影

今年も、6月8日(水)から、蚕の飼育が始まりました。四令からの飼育なので、3日目くらいで眠中、脱皮が行われました。6月の末には、繭になりますので、早めに見に来てください。

- 十六、竹内浩子 (夕鶴の里友の会) 『貧乏神』
  - 十七、石井らら (宮内小六年生) 『和尚と小僧』
  - 十八、井上華那 (中川小五年生) 『明神様の片目の魚』
  - 十九、太田慶子 (長井小町の会) 『サルの子き肝』
  - 二十、堀 敏子 (民話会ゆうづる) 『勇気のある小僧つこ』
- ◎ 出演いただいた皆様、素晴らしい語り、ありがとうございました。

開

講

！

# 社会人力育成講座

学生の社会人力を育成することを目的に、今年も五月二十八日(土)に社会人力育成山形講座が開講しました。

今年四年目で、六月十一日、六月二十五日、七月九日の合計四日間の日程となっております。

今年、山形大学、東北芸術工科大学、米沢女子短期大学などの女子大生八名が受講します。夕鶴の里の三つのキーワードである「見る」「聞く」「体験する」を内容として、語りを聞く他に、語り部体験、南陽市ゆかりの地巡り、そば打ち体験、機織り体験などが予定されております。



6/11  
南陽市ゆかりの地巡り  
「妹背の松」にて

# 語り部養成講座

夕鶴の里自主事業実行委員会主催の「第十七回夕鶴の里語り部養成講座」が六月四日(土)開講しました。

今年、大人三名、子ども六名の受講生が集まりました。

開講式では、渡邊記美子自主事業実行委員長の挨拶の後、受講生の自己紹介があり、初めての受講生は、少し緊張した様子でしたが、練習に入ると、講師の先生と談笑している場面も見受けられ、和やかな雰囲気の中、スタートしました。



開講式の様子

## お知らせ

### 「昔のあそび」

☆☆ペットボトルでピザ作り☆☆



・ 日 時：7月23日(土)

10時より

・ 参加費：1人200円



南陽市出身の首都圏在住者で組織している東京南陽会七十五名の皆さんが、五月二十三日夕鶴の里に来館しました。  
当日は民話会ゆうづるの島貫貞子さんの民話口演、「鶴の恩返し、若返りの水、屁つたれ嫁ご」など、全6話が披露されました。  
帰り際には「方言が懐かしかった」「若返ったようだ」「元気で頑張って下さいね」と、島貫さんとお話ししました。

## 東京南陽会



### 豆知識

#### 旧暦月名の由来

阜月(さつき)

〈5月〉田植えが盛んで、早苗を植える月「早苗(सानえ)月(づき)がまつって「さつき」となりました。

水無月(みなづき)

〈6月〉梅雨が終わり、水もかれ尽きる「水無し月」が「みなづき」になったと言われています。

「暦のおしえ」三須啓仙著より